

三木町文化財アソブ



蟇巣繩文銅鐸(白山出土)



三木町教育委員会

7

旧石器・縄文・弥生・古墳時代の三木町

三木町に人が住み始めたのは今から約2万年前の旧石器時代にさかのぼることが、池戸八幡神社遺跡や男井間池北東岸の七ツ塚古墳で発見されたナイフ形石器や翼状剥片からわかつてきた。縄文時代晩期の土器は農学部遺跡で出土し、縄文時代の落とし穴が西浦谷遺跡や尾端遺跡でみつかっている。弥生時代に入り、稻作が始まると、三木町でも本格的に集落が営まれ始める。弥生前期の土器は農学部遺跡、福万遺跡、鹿伏古川沿岸で出土しており、付近に集落の存在が推定されるが、弥生前期の大規模集落は町内ではまだ発見されていない。弥生中～後期の集落を代表するのは現在三木高校の建つ鹿伏中所遺跡である。また三木町で弥生時代といえれば抜きにできないのが白山出土銅鐸であろう。新川の水の恵みと秀麗な白山の姿と銅鐸があいまって三木町の池戸から下高岡に至る地域の繁栄が窺える。

古墳時代前期の中でも早い時期の前方後円墳が三木町にある。最近明らかになってきた池戸八幡神社1号墳である。内部は未発掘であるが、池戸から白山に至る地域、もといいえば新川・吉田川の流域を統合するような有力者が池戸にいたことになる。

古墳時代後期になると各地に古墳群が作られ、現在の大字や小字に相当する地域の成立の姿が見えてくる。池戸・井上・鹿伏・下高岡・井戸北部（南山田）・朝倉・田中・氷上（丸岡）・上高岡（諏訪）・井戸南部（西土居・中代）・鹿庭などに多く見られる古墳は、先祖の生活の拠点を教えてくれている。水系でいえば、新川、その支流である鍛冶川、そして吉田川・朝倉川がそれぞれの古墳と集落の形成に深くかかわっていたと考えられる。

丸山古墳

右片袖型の石室を持つ横穴式古墳であり、城池の東岸に面した小山の頂上にある。天井石の一枚がなくなっているが、他はほぼ完全な形を保っている。出土した須恵器の坏（つき）から6世紀末ごろと考えられる。玄室の長さ約2.4m、幅約1.7～1.9mで奥壁の部分が最も広い。高さ約1.5m。羨道（せんどう）は西に開き、長さ2.7m、幅45～80cmで入口が狭い。壁面は小さな石を積み上げ、上に行くほど狭くなる持ち送り式である。右片袖型の石室は、東方の竜現社古墳から西方の植田八幡神社（高松市東植田町）境内の横穴式古墳に類似があるので、共通した地域性を示している。

城池がまだなかった古墳時代の地形から考えると、丸山古墳の被葬者は西方の植田方面と関係が深かったようと考えられる。三木町（三木郡）と高松市（山田郡）という区画もなかつた頃である。水田稲作には恵まれない地域であるが、700mほど北西の公測池東岸斜面（高松市）、700mほど南東の宮池北岸斜面（三木町）には須恵器の窯跡があることから、焼き物をする集落が繁栄していたと考えられる。丸山古墳の被葬者は、朝倉川の水を利用して稲作も行いながら焼き物を行う集団の1つの長だったのであろう。



朝倉・丸山古墳

竜現社古墳

二ツ池の北西岸の丘陵上にある三木町最大の横穴式古墳である。池を作ると表土を取られたといわれ、石室が露出している。石室の上に水神（竜神）が祭られている。石室は長さ約3.5m、幅1.4～2.1m、高さ約1.9mで、右片袖型である。現在は奥壁部が開口し、羨道部は不明である。

田中の平野部が広く見渡せる場所に立地していることから、後に田中郷と呼ばれる地域の有力者の墓である。吉田川の流れをはさんで氷上側の丸岡・石塚にも古墳が群集している。



田中・竜現社古墳

2

奈良・平安時代の三木町

古墳時代が終わると、世の中は仏教文化を取り入れる飛鳥・白鳳時代へと進んでいく。もう古墳作りは古いとばかり、各地の豪族は競って寺院作りを始める。当初は寺に財産を付けねば税が免除される制度があったことも影響している。そんな時代の風潮があったとはいえ、特筆すべきは、そう広くない三木町に古代の寺が3つも作られたということである。下に紹介する始覚寺跡と長楽寺跡は早くから知られていたが、香川用水の工事中にもう1つの上高岡廃寺が発見された。今も田の畔に礎石らしい石が見られる。丸瓦の文様を見ると、さぬき市寒川町の極楽寺跡から見つかる蓮華文にならったように見受けられる。

古墳の分布が地域の形成を表しているのと同じように、町内3つの寺跡は地域の統合を表していると見ることもできる。始覚寺は池戸と井上、長楽寺は田中と氷上、上高岡廃寺は上高岡・井戸南部（西土居）・鹿庭。これら地域的有力者の存在が浮かび上がってくる。池戸には秦氏、氷上には物部氏のいたことがわかる。上高岡・西土居・鹿庭地域の有力者の名前はわからないが、極楽寺との関係から類推すれば、讃岐氏（後の寒川氏）から分かれて三木で勢力を張った豪族の存在が浮かび上がる。

白鳳時代の三木町の産業で忘れてならないのは、焼き物（窯業）である。井上の小谷窯跡で白鳳期に須恵器を焼いた跡が見つかっている。奈良時代には池戸から東大寺正倉院に絹織物（あしきぬ）が納められているので、養蚕・絹織物が行っていたことがわかる。

奈良時代になると郡（こおり）と郷（さと）が制度化される。郡は年礼と一緒にになった三木郡が置かれ、三木町の範囲には池戸郷・井上郷・高岡郷・井戸郷・田中郷・氷上郷が置かれた。

● 始覚寺跡

飛鳥の藤原京と同じ軒平瓦や讃岐国分尼寺と同じ軒丸瓦が出土し、現在の始覚寺の境内に古代の塔の心礎石があることで広く知られていた寺跡であるが、最近の調査で、古代の寺域は現在の始覚寺の西側であることが明らかになった。大きさはほぼ1町（109m）四方と考えられる。寺域の北側に瓦を焼いた窯が4基発見されており、平安時代末の白磁片が出ている。



現在の井上・始覚寺の西に広がる古代の始覚寺跡（南大門付近）

● 長楽寺跡

長楽寺跡は南から流れてきた吉田川が平野部に出る所に形成した河岸段丘上にある。現長楽寺橋の南東の丘陵上であるが、寺跡としての遺構は何も残っていない。この寺跡を有名にしているのは瓦である。表紙に掲げたような秀麗な瓦が見つかっている。丸瓦も平瓦も藤原宮式である。飛鳥に藤原京が作られたとき、いち早く最新の瓦の文様を取り入れて寺を作った豪族がこの地にいたことがわかる。平瓦の文様は偏向唐草文であるが、始覚寺の同種の文様にくらべると、こちらの方が少し早い。



氷上・長楽寺跡を北西から望む（台地上が寺跡）

3

鎌倉・室町時代の三木町

平安末期、源平両氏が覇を争ったが、屋島の戦いのとき源義經が三木郡を通ったのは確かである。ただし半礼側を通ったか三木側を通ったかは定かでない。どちらにも伝説が残るばかりである。

鎌倉時代になると武士の支配する世の中となつたが、都の貴族や寺社の荘園支配は続いた。全国はほぼ半分が公領、半分は荘園であった。三木町は全域が公領だったが、郷の名前までも実質は私領(荘園)と同じであつた。武士の立場で三木郡を支配したのは寒川氏と同族の三木氏である。武士の八幡信仰が広まつたことにより、三木町でも各郷に八幡神社が建てられ、古くから祭られてきたその土地の神は合祀されることになった。高岡八幡(現在の鰐河神社)では元寇のときモンゴル退散のための祈祷が行わっている。

鎌倉幕府が滅んで南北朝対立の時代になると、南朝側の細川清氏が白山で挙兵した。場所ははっきりしないが、畠山試験場横の新田神社が挙兵の地(白山城伝承地)とされている。小糸の熊野神社の鰐口に応永27年(1420)の銘があることから、南北朝期の頃から山間部に村ができるはじめたと考えられる。奥山の場合も熊野神社の一本杉の樹齢から同様に考えられる。

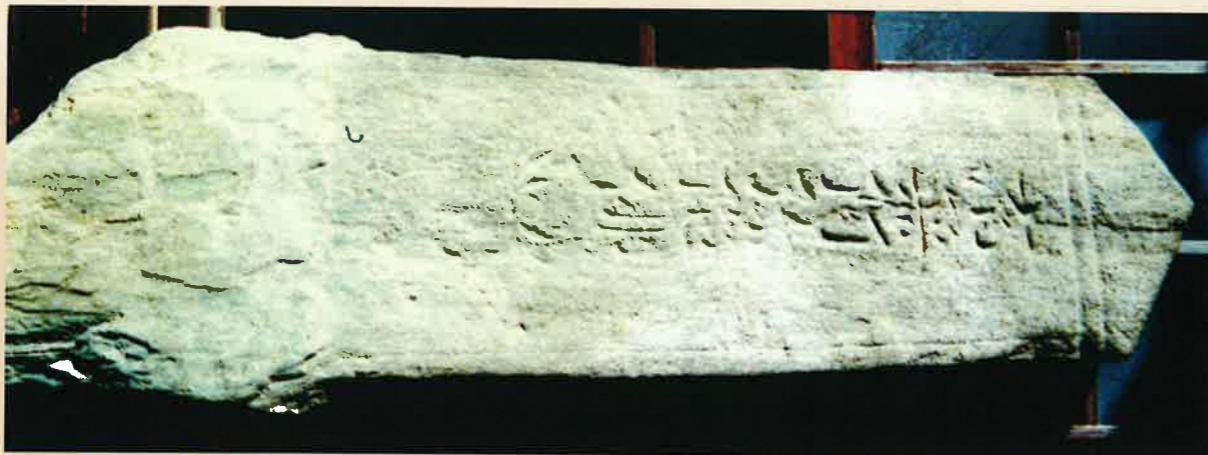
室町時代に東讃を支配したのは安富氏であり、当初その居城とした高岡城跡(元は三木氏の城)・池戸城跡が残っている。池戸城をわざと低い土地に築いたのは土木技術の高さを示す意味があったであろう。現在の池戸商店街の道がもと川だったということはわかっているが、自然にできた川というより、池戸城築城のとき安富氏によって整備され、堰に水を引いたものと考えられる。

● 真行寺の板碑

板碑は「いたひ」、または「いたび」という。供養塔である。生きているうちに作る逆修塔である場合もある。阿波の青石(縫泥片岩)でできいて、阿波ではよく見るが讃岐ではほとんど見ない。何らかの関係で阿波からもたらされたものであろう。頭を三角にとがらせて2本の線を刻み、その下に「南無阿弥陀佛」の6字名号を刻んでいる。室町時代前期(南北朝期)のものと見られる。下部もとがり、土に立てるよう作っている。高さ1.21m、幅30~37cm、厚さ3~6cm。一遍上人が爪で彫った「爪彫りの名号石」との伝説もある。

● 和爾賀波神社の三十六歌仙扁額

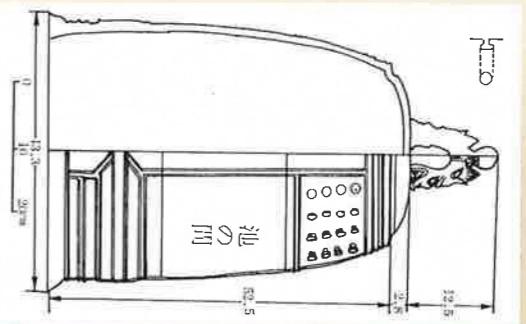
横180.5cm、縦29cmの分厚い板6枚に各6人、計36人の有名な歌人と、その人の詠んだ歌が墨1色で書かれている。江戸時代の天保6年(1835)に高松藩士覚政典が箱を作つて納めた。その箱が残っているのも貴重であるが、箱書きによれば、この扁額は享徳4年(1455)閏4月に安富盛保が奉納したもので、書いたのは絵師の法眼忠光とわかる。この扁額を納めた安富盛保は平木の高岡城から雨滝城を築いて移つた安富盛長の弟で、おそらく高岡城を居城として三木郡を支配することになったので、その無事を願つたものであろう。ただしほとんどは在京していた。



井戸・真行寺にある板碑



井戸・和爾賀波神社にある三十六歌仙扁額6枚の内2枚(部分)



梵鐘実測図

小蓑出土の梵鐘

戦国時代になると三木町もいやとうなく戦乱の渦に巻き込まれる。小蓑から出土したこの梵鐘（総高 67.8cm）は、戦国時代の三木町を考えさせてくれる。銘によれば、この梵鐘は文安3年（1446）に阿州（徳島県）広棚村（現美馬市）で大滝山の東中腹）善福寺に掛けられたものである。それがなぜ小蓑から出土したのかを考えると、浮び上がってくるのは長宗我部氏の讃岐侵攻である。広棚にはこのとき長宗我部氏に従軍した兵士の墓が祭られている。おそらく大滝越えで十河城攻めに向かう一団が陣鐘として持ち去った鐘を小蓑で置いて行ったのであろう。

長宗我部元親が十河城攻めの根拠地にしたのは三木町の平木城（高岡城）である。元親本人が高岡城に在城したし、多くの兵士で三木町はごったがえしたと考えられ、危険がいっぱいの時代であった。東川城は十河氏が長宗我部を迎えたため吉谷に置いた砦であり、大塚城は同じく十河氏が池戸に置いた砦である。

4 江戸時代の三木町

戦国時代末期、長宗我部氏の十河城攻めで三木町も戦乱の中に置かれたが、天正15年（1587）讃岐に生駒親正が入部したこと、復興期に入る。生駒4代高俊の寛永5年（1628）、西嶋八兵衛によって山大寺池が築造された。松原家文書・安西家文書によると両家は生駒氏の被官となっている。生駒時代の町内は田中郷・田中山・氷上郷・氷上山のように村としての編成は未成熟であったが、次の松平氏（高松藩）時代になると、平木村・井上村・池戸村・鹿伏村・田中村・氷上村・上高岡村・下高岡村・井戸村のようになり、今日の大字のものになる村名が現れてくる。ただし奥山・鹿庭・朝倉・小蓑はそれぞれ東西別個の村構成になっていた。

生駒時代の寛永10年（1633）に描かれた「讃岐国絵図」では、新川・吉田川の流れが今日とは異なっている。高松藩時代になってから付け替えられたと考えられる。嘉永6年（1853）発行の「讃岐国名勝図会」には三木町各地が描かれているが、中でも虹の滝は高松藩士の行楽地として親しまれた。

常光寺文書・経典・版木

分量といい内容といい三木町を代表する近世（江戸時代）の古文書である。常光寺は高松の興正寺別院勝法寺の配下として東讃の真宗寺院を統括した有力な寺である。勝法寺が高松空襲で焼けたことによりこの常光寺文書が東讃における真宗寺院の動向を知りうる唯一の史料となっている。三木町をはじめとする村落の動向や世相も記録されている。例えば村の若者が行った俄（にわか）芝居のことなど多岐にわたる。



氷上・常光寺文書

常光寺経蔵・傳大師像

常光寺経蔵は明治31年（1898）に再建されている。三間四方の土間で、屋根は宝形造りである。経蔵内部の中央に、「輪藏」という回転式の経典収納棚（経厨子）を備えている。輪藏の手前には、この輪藏を発明した中国の土俗の仏教者・傳大師（中國陳の宣帝大建元年 [569] に73歳で没）が従者普成・普建を左右にしている像が安置されている。

経厨子の中には一切経を納め、1回まわすごとに一切経をすべて読誦したのと同じ功德があると考えられている。



氷上・常光寺経蔵

5

近代の三木町(建造物・有形民俗文化財)

明治新政府の成立に伴い高松藩は廃止されたので、三木町は県のもとに三木郡の一部として各村が置かれることになった。江戸時代にはそれぞれ東西に分かれていた鹿庭村・奥山村・朝倉村・小蓑村はそれぞれ1つの村としてまとまり、現在の三木町の全大字がでそろうことになる。明治元年(1868)に明治政府が出した「五橋の掲示」(板)が小蓑に残っているが、その段階ではまだ西小蓑村となっている(池戸公民館で展示中)。氷上の大西家住宅は明治5年に建てられたものであるが、藩政時代の郷士の格式を示す郷土屋敷の建物である。

明治32年、三木郡は山田郡と統合し木田郡となる。20年後の大正8年(1919)、新たに木田郡役所が建設された。その建物は大正のおもかげを残し、町の文化財に指定されるとともに池戸公民館として町民の作品発表の場に、考古・歴史・民俗資料の展示に活用されている。また昭和2年(1927)建築の神山村役場建物は江戸時代の庄屋建築と近代の村役場建築を融合した貴重な遺構として古建築研究者から注目を集めつつある。

三木町は江戸時代の常光寺経蔵をはじめ上に挙げた各時期の建造物が残る、いわば、まんがん(まるごと)博物館的様相を呈している。大正元年(1912)琴電長尾線が開通した。その開業時以来の石積みの鉄橋橋台が新川鉄橋・鳴部川鉄橋に残っており、県の近代化遺産に数えられている。これも三木町の青空博物館の展示物といつてよい。

三木町といえれば獅子舞の里として広く知られるようになってきたが、獅子の代表が古きからいって鰐河神社の大獅子(有形民俗文化財)である。無形の民俗としては南山田の山の神祭りが、山の中に臨時の祭場を設営し、必ずオコゼを供えて嚴肅に行われている。



旧木田郡役所建物（池戸公民館）

○ 旧木田郡役所建物

県内に唯一残る旧郡役所の建物。屋根の中央に立つドーマと呼ばれる明かり採りの意匠は大正ロマンを感じさせる。洋館を模して建てられた擬洋館である。窓ガラスは波うつ板ガラスが今もそのまま残っている。木田郡発足後も西徳寺内を仮庁舎としていたが、大正8年(1919)8月にこの庁舎が完成した。土地の購入から建築まで、篤志家の寄付や青年団の協力があった。

大正12年の郡制廃止後は県蚕業試験場、県農業試験場三木分場などを経て、現在は池戸公民館として使われている。



○ 鰐河神社の大獅子

大獅子が3つもある「獅子の里、三木町」の中で最も古い大獅子である。下高岡・新闇の家吉神社にあるこの獅子頭を納める箱に安政5年(1858)の銘があることから製作年代が推測される。大きさは高さ63cm、幅90cm、奥行き1m。木の棒組に竹で形作られ、和紙が張られて彩色されている。

油单は長さ12mで、中には7個の竹の輪が取り付けられ、使うには子どももいれて50人は必要である。祭りでは勇壮な存在感を示すが、指定区分は獅子舞伝承としての無形のものではなく、品物としての有形民俗文化財の指定である。創始伝承としては悪病退散を願ったとされている。

下高岡・鰐河神社の大獅子

6

三木町の天然記念物

熊野神社の二本杉



奥山・熊野神社の二本杉



氷上・蓮成寺のイヌマキと、その幹や枝に寄生して咲くフウラン

蓮成寺のイヌマキとフウラン

氷上の福万にある蓮成寺のイヌマキは、樹高12m、目の高さで幹の回りは2.9m。イヌマキは本来深山に生える木なので平地でこれ程に育ったものが生えているのは珍しい。おそらく近くを流れる新川の伏流水が豊富なためであろう。

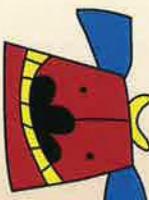
しかし県内にイヌマキの大木は他にもあるのに、このイヌマキが貴重なのはフウランがたくさん着生しているからである。フウランは野生のランの一種で、絶滅危惧種となっている。7月の田植えの時期に白い花がたくさん咲き、訪れる人が多い。深山の趣を漂わせる植物と景観を大切にしたい。



奥山の二本もろだ 昭和61年3月の大雪で1本倒れる

二本もろだ

奥山・地蔵堂前のもろだ(ネズミサシ)の大木2本を町天然記念物に指定したのは昭和60年(1985)である。ところが昭和61年の大雪で左の1本が折れてしまい、今は1本だけになっている。折れた方が大きくて、幹の回りが2.6m、右の1本は2.3mである。折れた方の木は内部が虚ろになっていた。もろだの木としては稀に見る大木であり、しかも山の中ではなく道路際にあるのが珍しい。



文化財をみんなで守りましょう。



「讃岐国名勝図会」（江戸時代）より虹の滝の様子（左）と二本杉の様子（右）（一部着色）



鰐河神社文書（江戸時代）より白山・長尾街道・猿橋の様子（左）と鰐河神社・新川の様子（右）（一部着色）



専修寺の涅槃図（江戸時代）



始覚寺境内絵図



○ 周知の埋蔵文化財包蔵地で現状を変更する場合は、三木町教育委員会生涯学習課までご相談ください。

三木町文化財マップ

発行 平成31年3月
編集・発行 〒761-0692
香川県木田郡三木町大字氷上310番地
三木町教育委員会生涯学習課
電話 087(891)3314 FAX 087(898)1994